



As For The Group,

いかなるグループであれ、

MIKI DORA / photograph by BUNKER SPRECKELS

I Wasn't In... I Wasn't Out.

属すことも、距離を置くようなこともしなかった。

I Was Just Accepted There.

ただ目の前で起きている事象として受け止めたに過ぎない。

I Was Accepted There For
My Wave Riding

すべては波に乗るためである。

Not For My Personality.

わたしのパーソナリティとは何の関係もない。

by Miki Dora



BUNKER SPRECKELS / photograph by MIKI DORA

LOS URBAN ANTI HEROS

柘田琢治に聞く、LAビーチカルチャーの真髄

社会システムなどおかまなしに奔放に生きた、'60~'70年代ロサンゼルス (LA) の伝説のサーファーたち。彼らがビーチとストリートで繰り広げたムーブメントは、クリエイターたちによっていまも記録し続けられている。LAのカウンターカルチャーを象徴するサーフ・シーンに欠かせない人物たちについて、長年マリブをベースに活動している柘田琢治が語る。

Text : Masuda Takuji / Edit : Osonai Takashi / Special Thanks : Tom Adler

誰にも依存せず、思うがままに生き抜いた2人こそLAサーファーの象徴

エンターテインメント産業のグラウンドゼロ・ロサンゼルス(LA)には、マリブというサーフィンのメッカがある。最近ではシドニーでもエンターテインメント産業が盛んになってきたが、サーフ・カルチャーとアーバン・カルチャーが過激にぶつかり合うLAのビーチとは発散されるエネルギーの桁が違う。

この多彩なカルチャーがミックスされるLAをベースとする連中の特徴は、ミュージシャンにしろ役者にしろ、自然にデンジャラスな匂いを漂わせていることである。カスタマイズされたバイクやローライダーに乗るサーファーやスケーターたちといった、実質的にLAを動かしている人間とつるむようになるからだ。そんな彼らはサーフ・ブランドよりも、そのまま夜遊びできるスタイルでビーチにいる。もしくは前夜の格好でビーチへ直行しているとも言える。

100年ほどの近代サーフィン史において、世界中のサーファーに最も影響を与えている存在は、'60年代のロングボード全盛期にキングとして君臨したマリブ時代のミッキー・ドラだろう。テクニカルとは無縁の初期サーフィンは、ビーチ・サイドでのウクレレ演奏やオイルを塗った体でボディ・ビルディングというポリネシアンごっこなどの光景だった。歴史の上ではそうした時代が近代サーフィンのスタートとされているけれども、しかしドラによる波乗り創世記とは「有効的なライディングをベースに成立するオリジナリティが重視された'50年代後半」のことである。Da Catというニックネームで呼ばれた彼は、素早いフットワークと運動神経によって、「波に乗る」を「波に乗る」というパフォーマンス時代へと突入させたのだ。

ドラは日焼けした肌とグッド・ルックスを持ちながら、クレジット・カードの詐欺罪で長年刑務所に入るなど、パーソナリティは社会への協調を見せない問題児とされていた。そのくせハワイの巨大な波をこなしてしまうリアルな存在であり、「BEAT」

ジェネレーションと「BEACH」ジェネレーションをつないだ唯一無二の人物とまで評されている。態度、インテリジェンス、シニカルなアウト・ルックを持った魅力あふれるDa Catは、「サーファー」というよりもビーチ

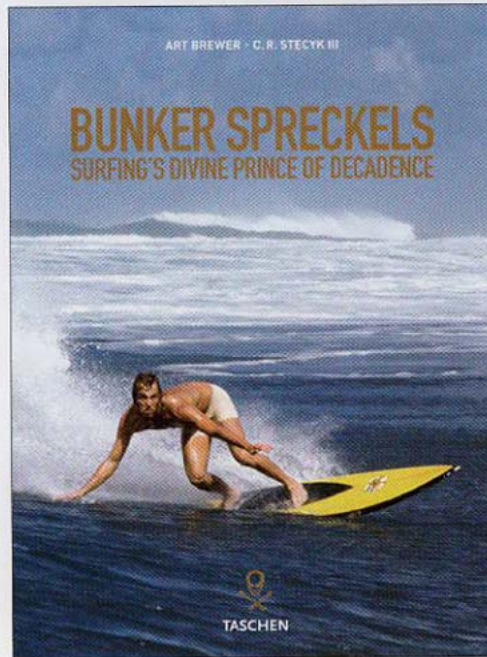
世代違うが、ともにマリブ・キャンオンにある私立セントジョンズ・ミリタリー・アカデミーの卒業生であり、'60年代中旬にはビーチでメンター・シップ(師弟関係)を始める。1967年の米SURFER誌には、ドラとフォト・

在を世界へ広めた。そのバンカーとは、ドラ同様にハワイのパイプラインなどの波でトラックを残すリアル・サーファーであり、波乗りの天才レアード・ハミルトンやスケートボード界の王様トニー・アルバたちがメンターとした存在である。

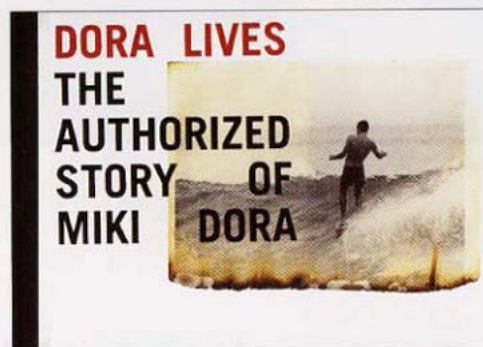
彼はハリウwoodsの俳優を義父とする環境からも、メジャーを嫌いアンダー・グラウンドなケネス・アンガールの映画「ルーシファー・ライジング」に出演する準備をしていた。他方では、自らのエイリアス「THE PLAYER」を登場させたポートレート・シリーズやロード・ムービーの制作を南アフリカの最果ての地で、写真家アート・ブルーワーやスバイダー・ウイリスと始めていた。だがこのドキュメンタリーは完成を見ることなく、激しい27年間を過ごしたバンカーは1977年に薬物の過剰摂取で他界した。

この数十年、世界チャンピオンや多くのプロ・サーファーたちはアメリカ東海岸のフロリダやオーストラリアのゴールドコーストから誕生しており、大都市ではなく郊外のビーチ・タウンを出身とする。アメリカにおいても、数ある産業はLAから1時間ほど南下したオレンジ・カウンティを中心に栄えている。言うなれば、サーフィン界のメイン・ストリームは郊外の沿岸部を中心に展開されてきたのである。しかしメジャーなシティ・サーファーであるドラもバンカーもこれらサーフィン産業とは無縁であり、業界的視野から見ればまったく邪魔者でありアウトサイダーだった。サーフ・メディアにも産業にも、自身をアピールする必要性もその気もないインディペンデントな人物であり、だからこそ彼らのサーフィンや残されたビジュアルは彼らのためだけに存在したのだ。

そ してまったく商業的ではないLAサーフ・シーンにおいて、忘れてはいけない人物がもう1人いる。誰におもねるわけではなく、死ぬまでサーフィンに対してピュアであり続けた2人をプライベートな視点からドキュメントしているクレッグ・ステシクである。



今秋発売。無価値な情報ばかりの時代にデカダンス的な生き方を提示するビジュアル・ブック「BUNKER SPRECKELS」 ©TASCHEN



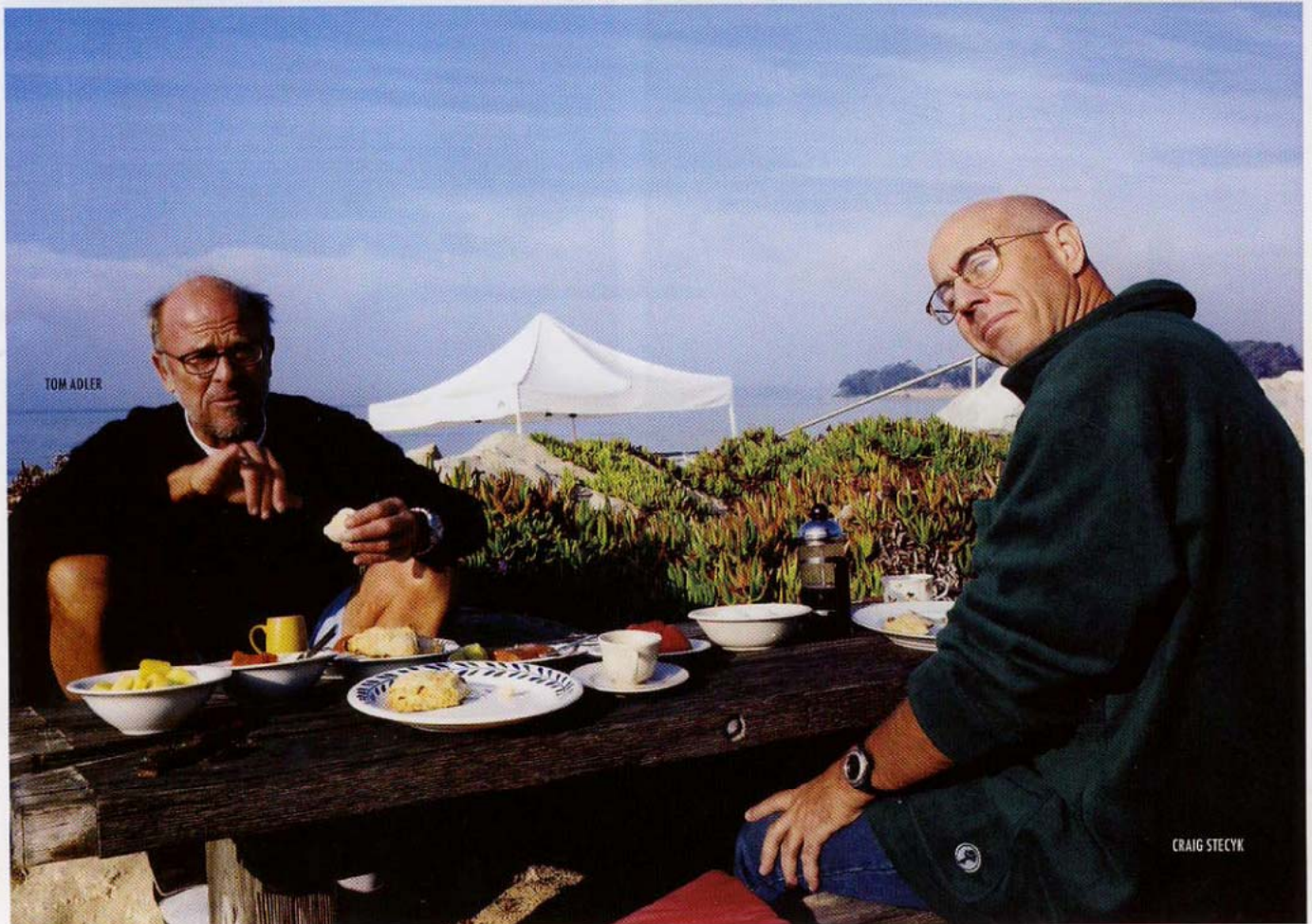
ポスト第2次大戦の空気を体現し、サーフィンを精神的な活動とする者としてドラを捉えた本「DORA LIVES」 ©TOM ADLER BOOKS

カルチャーの「シンボル」だったのだ。またクラーク・ゲーブルの義理の息子であり、巨万の富を持つスプレックルズ家の子孫であるバンカー・スプレックルズもマリブに生きたアイコンである。バンカーとドラは一

ジャーナリストのクレッグ・ステシクが構成した記事「クラッカー・ジャック・シオリー」が掲載され、特集内でバンカーを「ジェネティック・スペース・チャイルド(生まれながらに最先端を突き進む者)」と掲げ、彼の存

LOS URBAN ANTI HEROS

栢田琢治に聞く、LAビーチカルチャーの真髄



取材の対象として世間が興味を抱く人物に“呼ばれてしまう”クレグ・ステチック(右)。ドッグタウン、ミキー・ドラ、そしてバンカー・スプレックルズ。いずれもが彼によって世界へ発信されたのだ。左はパートナーともいえるブック・デザイナーのトム・アドラー photograph by TAK

サンタモニカ出身でアート・スクール卒のブック・グラウンドを持つクレグは、'70年代にスケートボードの新しいムーブメントを起こした町ドッグタウンを、その内側にいる1人として伝え続けた張本人である。同時に、ドキュメンタリー映画「DOG TOWN & THE Z-BOYS」の脚本になるエッセーを書き、当時のベニスビーチ界隈で何が起きていたのかを豊富なビジュアルとストーリーで検証する本「DOG TOWN - THE LEGEND OF THE Z-BOYS」を、弟子であるグレン・E・フリードマンと出版した人物として知られる。

このクレグのパートナーのブック・デザイナーがトム・アドラー（ロングビーチ出身、サンタバーバラ在

住）だ。2人のタグによって、サーフィン写真界の巨匠ドン・ジェイムスによる「SURFING SAN ONOFRE TO POINT DUME 1936 - 1942」、ミキー・ドラの生涯をつづった「DORA LIVES」がこれまでに発表されてきた。そしてこの初秋には、バンカー・スプレックルズをサーフィンの世界におけるデカダンスの象徴とした「BUNKER SPRECKELS」がタッセン社から出版される。サーフィン写真界のドンであるアート・ブルワールのビジュアルと、バンカーが死を迎える3カ月前、クレグによって収録されたインタビューをテキストとすることで完成したビジュアル・ブックである。

ドラやバンカーは唯一「芸術的」に

生きたサーファーだった。たとえば徹底的にアウトサイダーだったドラは、カリフォルニアから南アフリカ、チリ、ニュージーランドを目指し、最終的にはドロップアウト的なアウトローが集まるサーフィン界からも遠ざかってしまった。私たちはもう、観客席から物語として経験するしかないドラとバンカー。予定調和を嫌い、やりたいように生き、コミュニケーションには広さよりも深さを求めた彼らは、世界的大都市LAをホームとしながらハワイ・ノースショアの波にも乗った。そのスケールは、欲望うずまくLAというカオスを間近とする環境で磨かれ、すべてが規格外であり、エゴイスティックながらも過回しな愛情も感じられる。金持ちだ、

ドラッグ中毒者だ犯罪者だと存在を最小化しても、彼らが残した伝説の光はビジュアルとして残され、ニューヨーク株式市場でトレードされるまでに家畜化されたサーフィン界に取り憑き続けるのだ。

栢田琢治

1971年神奈川県鎌倉市生まれ。2001年、日本プロサーフィン連盟(JPSA)主催のロングボード・サーキットでグラウンド・チャンピオンを獲得。発行者としてのメディア活動も多く、フリーペーパー「SUPER X MEDIA」(1996~2003)の制作・発行や、DVD「ORIGIN OF BLUE」(2000)ほか映像作品の監督・プロデュースなどを行う。スイスへ拠点を移した現在も雑誌への寄稿も多く、またサーフィンの本場、ハワイ・ノースショアにあるバイブラインでも、そのライディングは世界に知られるところとなっている。目下、バンカー・スプレックルズのドキュメンタリー・フィルムを製作中。